

この附近(仙田利兵衛前)に石碑がある。天保九年頃此處を堀つた時崇つた爲供養して建てたもので、こゝは織田與次郎信康の舊宅地であると言はれてゐる。

三、お猿山

この磨山の西に平たい山がある。是をお猿山といふ。文祿頃千田平内といふ人が猿を飼つてゐたと大久地古事記に出てゐる。

第六節 切支丹に關する古跡

第一項 余野にあるもの

一、僧都庵

こゝはもと切支丹寺があつたとも言はれるが詳しい事はわからぬ、僧都庵大福寺等と字名になつてゐるが寺があつたものでないかと思はれる。此の僧都庵(余野の橋の竹籤附近)には澤山榎が生えてゐた。

第二項 下小口にあるもの

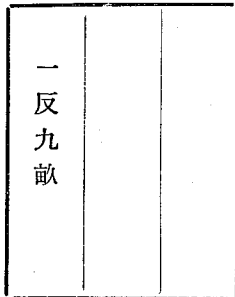
一、奉祿町

郡道の西、下小口の真中を通つて墓に到る真直ぐな道がある。これをほろく町といふ。之は次に記す「海度」と關係して一寸面白ふうになつてゐる。附近から「ほろく」「煎るもの」が出るといふ人もある。奉祿町の名は大久地古事記にも出てゐる。

二、海度

下小口の墓の附近で、字名は北屋敷、こゝを俗に海度といひ、少し前までは雑木が生へてゐて海度山と言つてゐた、此の邊りに切支丹信徒が住んでゐたと言はれてゐる。こゝは奉祿町の北の端で眞四角に區切られてゐる。この眞四角な所に切支丹宗徒の住家があつたといふ。現在はこの四角の中央を横ぎり余野への道が出来てゐる。

↓ほろく町



三つ共同じ様に一反九畝宛
で計六段計り

第三項 中小口にあるもの

一、地藏様

中小口北の方定光寺の跡附近にある。こゝは切支丹宗徒を殺し其の供養の爲建てたものであるといふ。法華經の題目『南無妙法蓮華經』を書き埋めたものであると傳へられてゐる。

第七節 其の他の古跡

第一項 秋田にあるもの

一、佛 鬼 塚

二つ有つて一は字西藪山にあり、一つは字宮裏に在る。前者は墓地となり後者は畑となる。昔から金銀の鎖が埋められてゐると云ひ傳へられた。尙此の塚の附近に一老婆が住んで居て死人の豫言をした。即ち老婆が「塚の中で鐘を叩く音がするから近日中に死人がある」と豫言した大抵豫言通りに死人があつたと云ふことである。此の老婆の豫言と同じ傳説が秋田北替地の同心塚についても言ひ傳へられて居るが思ふに此の傳説は同心塚のものであらふ。

二、櫻 塚

長松寺の西南字柳原にある。四百年前に楠木正成の子孫藤原^{ツクシ}甚八郎と云ふ者が後柏原院の後を慕ひ奉つて奈良から此の地に來り此の塚で一夜を明したから一名一夜塚と言ふ。又甚八郎がついて來た杖を此の地に突き立て、置いたから杖から芽が出て一重八重の櫻の花が咲いたから櫻塚とも云ふと。

甚八郎は正成の後胤河内文吾の子で東春日井郡小牧町河内屋に永住した。現今河内屋には楠氏の後胤なりとて楠氏の系圖を持つてゐる家がある。

櫻塚のさくらは近年まで直径十四糎米許りの老櫻があつたが枝幹共に朽ち枯れ其の根元から出たといふ小櫻が一本今塚に植へられてゐる。尙一書には次の如くある。

「口碑の傳ふる所に依れば、往昔平城の人當地に縁由ありて神靈(不明)を負ひ奉り京九重の櫻木を杖にして此の地へ來り廣き原野を開墾せんとし先づ神靈を鎮座し奉り奈良志の神社と崇め杖にせし櫻木を地に挿せしに根ざして生立せりと云ふ、今より數十年前までは數株の老櫻ありて花時遠近より遊ぶ者ありしが組の人民採薪の爲め其の老木を伐採したるが故現今の有様となれり」と。

三、火 走 り 橋

字寺東にある、此の附近最初の用水に架せられた石橋で現今も残つて居るが折れて居る。夜此の橋から火が走つたといふので火走り橋の名が生じた。

四、同 心 塚

長櫻金比羅堂の東に在る。

封建時代の逮捕更同心を埋めたとも言ひ、又國狹土命の塚なりとも言ふ。永らく官有地であつたのを、昭和四年に大字豊田の社本仁左工門が拂下げを受けて後發掘したが人夫が病氣に罹つたと言ふので今も尙絕對に手を下す者が無いの

みならず酒を持参して参拜する者がある位である。附近の土地を堀つた時彌生式土器が出たと云ふ。

第二項 豊田に在るもの

一、岩 木 塚

小折新田の西方なる霞野北方に在る。源頼光の四天王の一人渡邊綱時代の蓬原の合戦の負傷者を埋めた塚であるといふ。今は開墾されて田になつて居るが昔長さ一米位の百石があつたとの事である。

二、岩 橋 の 塚

字岩橋に無名の塚が三つ計あつた、今開墾されて田になつて居るが附近に大きな岩があつて其の痕跡を認める事が出来る。

第三項 大屋敷に在るもの

一、大 塚

新田上の水車の東方字大塚に在る今は田になつて痕跡がない。

二、岡 田 塚

大口役場の西方約三百米の道の北側に在る。信長時代の岡田某と云ふ連歌師の屋敷か又は岡田某と言ふ武士の居城か

であつたと云ふ、之を開墾した者が病氣になつたと云ふ。

三、おさのゝ塚

大口役場の西に在り塚に小社があつて之を拜すれば遁走紛失した飼猫が家庭に歸ると云ふ。

四、鎮 塚

櫻塚の西方に在つたと云ふ、確然たる位置は不明で有る此處から高橋の字まで大きな橋が架けられた故に高橋と云ふ字名が生れたと云ふ。

五、十 三 塚

大口役場西方の三軒屋の西に、十三個の塚があつたといふ、今は開墾されて畑となつて由緒は不明である。

第四項 外坪に在るもの

一、十 三 塚

外坪巾上にあつて、犬山までに(名古屋から)十三あつたと言はれる。

二、山 伏 塚

松山にある。現在はこわしてない。

三、石 亀 塚

外坪神明社の隣りで樂田村になつてゐる。此の塚から馬の頭骨が出た、立派な大きな塚で小牧山合戦の死者を埋めたと云ふ。

四、梶原松、梶原宗安の碑及び太刀、服部の紋

松山と本郷との中間、南野と言ふ所に梶原松が生へてゐた、之を切りその跡へ梶原宗安の碑を建てた、梶原の太刀は河北の條で述べたのと少し違ふ話がある、それは外坪の服部清五郎と言ふ人が始め此の太刀を持ち次第に家が貧しくなり(貧乏刀といふ)後河北の仙田屋へは入つたものであると、刀は一點の曇りのない名刀であると言ふ。服部の紋は梶原の紋と同じ、何等かの關係があるものと見られる。

五、松

本郷藤田源太郎西南の道に大きな松があつた、之は六百年前のもので小牧陣屋にも記があると言はれる古いものであつたが今はない。

第五項 河北にあるもの

一、妙智庵

河北の西方に仙田藤右工門と云ふ人があつた、段々財産がよくなつて遂に殿様より舉母川(岡崎の方)に大工事あり此の人が仰せつけられた、普請がいよく出来て檢分される事となつた、其の時土地の庄屋がごまかし普請であると

て反對し、杭木を抜き仙田を率へぶち込んだ、遂に此の人は牢死してしまつた河北の村民は非常に氣の毒に思つて此の人を弔ふ爲に建てたのが今の妙智庵である。今から百三十年許り前の事である。

二、梶原宗安の太刀

梶原源太景季の子孫が今から凡そ五百年許り前羽黒へ來た、その人の墓は興禪寺にある、其の時従つて來た臣が七人あつて之を七名字と言ひ、木納、福富等の人が來た、其の一族の福富新藏が彼の山姥に關係して有名である、椿に居た福富某が非常に貧乏であつたから持つて居た刀を河北の仙田清六と云ふ人へ質入れをした、間もなく仙田清六は熱病にかゝり遂に刀は仙田七左工門に移り之が福富新藏の差刀となつてゐたとのことである、現今は名古屋住吉町一丁目仙田益時(仙田屋の後)方にある。

三、オチヨボ塚

二つ屋の郷裏大字河北字西狭間の地にある、明治初年までは可なりの塚が有つたが、水野某主宰となり僅か名ばかりの形を残し道路修理の爲毀ち取り其の後數回取毀され今は全く其の形を存しない。

此の塚に昔おちよぼ狐とて其頃ミヅセ狐(余野) 吉五郎狐(小牧山) オケハン狐(青塚) 清八狐(高橋)等と並び稱せられる古狐が棲んで居て附近の農民に忌まれて居た。或時諸國遍歴の六部が來て、オチヨボ狐の話聞き、オチヨボ狐に因果を含め之を伴ひ西濃に至り程良い所に棲ませ置いた狐も其後大いに從來の行爲を改め其の地に死んで神に祀られたといふことである、今の西濃に名高いオチヨボ稻荷は其の祠であるといふことだ。

明治初年此の塚の取毀の主宰者は間もなく永の眼病を病ひ、易者に占つたらオチヨボ塚のたゝりてあると云ふのでわざ／＼西濃オチヨボ稻荷に參詣し詫びをしたら直ちに全治したと言ふことである。尙塚の跡地は現在水野又兵衛の所有となつてゐる。

四、天神塚

二つ屋郷南方田圃中に有つたが今は道路改修の用に供せられ其の形を存して居ない、昔は大山三千本の中の一字が萩島、二つ屋の塚に在つて其の東南隅に天神社が祀られて居た所が天神塚であつたといふ、尙宇寺島なる地名は宇天神塚の北に連続して居る

大山三千本とは篠岡村大山から二つ屋に到る線（東南から西北へ）を引いた様な形に寺が三千あつて二つ屋にも其の末寺の一つがあつたといふ、尙大山の地名は小牧の南にもあるけれども恐らく篠岡村の大山であらうと言ふことである。

第六項 余野にあるもの

一、えの木

平城天皇の御代一人の僧が眞言宗を弘めんとして此の余野に來て持つて來た杖を土にさしおいた、それから芽が生じ枝が繁つたと。其の木の名が分らず世に自ら芽を生ずれば世の木と、又春より夏にかけて芽を生ずれば夏の木と、此處より榎の木と呼び榎木村と言ふ、何時か之が余野となつたと、之を此の村の神と崇め榎權現と唱へ此處に生えてゐた。

一丈三尺餘の老木には注連繩を張り祀つたと言ふ。（大久地古事記參照）

二、權現山

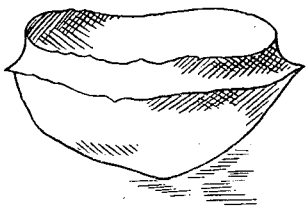
明治維新前には高さ五間面積約一反老樹茂れる小丘で權現を祀つてあつたが、今は土をとりこはして畑になつてゐる。矢張り縁起が悪いと言ふ話である、少し前までは大きな松（一かゝへ半）が在り石の塔（五輪）が三つ四つあつた、是に石碑がたつてゐたとの事である。尙明治初年開墾の際上古の土器類數多出たが心なき人のために破壊されたのは惜しい事である。

三、おじ神（氏神様、御宇神様）

三かゝへもある大きな榎の木が在りその本は朽ちて中に竹が生えてゐた、この中に小さな祠が祭つてあつた、今は其の木もない。

四、ほり向へ

今は清水といふ、こゝから次のやうな土器が出た、素焼で、うは薬をかけず形は圖の如きもの、大きき直径（口の）十五cm位である。



第七項 上小口にあるもの

一、念佛塚

大塚多賀の裏一町許りの所に念佛塚がある、之は天保年間に造つたと稱せられる。現在は土を道路へ持出して塚はない。年に一度宛百萬遍をやり供養する。

二、割れ塚

上小口北西大塚多賀の西にある、こゝからは岩（ふた石）及び刀剣が出た、岩は一つは上小口薬師堂今一つは妙徳寺（或は藤川順三庭園）へ行つてゐて二個掘り出された。刀剣は現在は薬師堂にあるけれども、ぼろ／＼になつてゐる此の塚の南に善光寺塚ともう一つ無名の塚が略々一直線上にある是を圖に示すと次の様である。



三、善光寺塚

割れ塚の南にある三つの塚の中で一番高い、この塚の真中には縦の大きな古木が生へてゐる、善光寺塚は現在も其のまゝになつてゐるがもう一つの無名の塚は今ではかきならして墓地にしてある。

四、大日塚

上小口の中程安藤安一裏に石塔が數個並んだ塚がある、之が大日塚である。今の石塔は享保頃のものである、この大

日塚は大久地古事記の中の「大日如来」と關係があるものと思はれる。

五、萬願寺塚

二ヶ所にある。今の松山濱吉の東の方田の中で現在はない、この邊りはもと田中屋敷と言はれ小口城主織田廣近公の家老田中惣右工門の邸のあつた所である、此の東の萬願寺塚からは「南無妙法蓮華經」の題目を書いた丸い石が出ると言ふことだ、元こゝには萬願寺と言ふ寺があつてこの邊りは其の趾であると言はれる。

六、小判の出した所

上小口字金三西現在の小口劇場の東の畑から昭和六年頃石原要七が小判二枚を掘り出した後又同七年に一枚出た。

(多分安政小判)

七、萬町橋

萬町がくぼに架けた橋であるから此の名稱が起つたものと考へられる、小口城が攻められた時寄手が釣り鐘落しの戦法をやらうと思つて大いに示威運動を見せた爲城中の者は城を出て防いだ、その留守に城に火をかけ攻めた、その時城中鎮護の薬師如来をこの川の中へ投げ込んだ、それを田中惣右工門忠春の守が引きあげたといふことである。現在此の如来は上小口薬師堂に祀つてある。

八、ひな焼のあと

上小口にもと二軒「おひな様」を焼いてゐた家がある。一軒は今の大家真一の家で之を始めた人は祖父の吉助である。

土は多くは附近の田からとり家に籠を造つて焼いた。ひなを此の近所界隅に賣つてゐた、今一軒は字田中の西方で寺澤がやいてゐた、兩方とも現在は止めてゐる。

九、鼻 塚 (萩島)

新木津の東にあり、塚は餘り高くない廣さ十坪許り、戦死者をこゝへ埋めたものといはれる、もとこゝに枝ぶりのよい松があつたが現在は切つてしまつてない。この木を切つた外坪の稻垣兵右工門は崇りを受けて直ちに二人の子供を無くしてしまつた、耳塚は樂田村青塚にある。

一〇、念 佛 塚

鼻塚の西方一町許りの所にある、百萬遍供養の棒が立つてゐる。

一一、寺 島

萩島字東出にある、櫻が一本生へてゐるが其のいはれは無いらしい。併しこの櫻が、二つ屋前の天神塚と同寺域にあつたものといはれてゐる。

一二、萩 島 焼

萩島の南方左工門の藪の西で今から二十七八年前萩島焼をやいてゐた、之を創始した人は川橋左工門の後で今井忠三郎といふ人である。土焼といつて少し黒ずんだ上品な焼物で湯呑み、煎茶々碗、急須等をこしらへてゐた、土は多く此の土地のもので、えんごろ(臺)等は他の土地から持つて來たものらしい、二三年經營して居たが損をして止めたとの事

である。

一三、七 本 杉

木津用水河岸に七本に分れた老杉がある、こゝには天神様(七尾の天神)を祀る、もとは用水の中が狭く杉は道の西側にあつたが段々侵蝕され今では道の東側になつてゐる。

一四、くましろ田(清右工門新田)

西成村くましろから清右工門といふ人が來て木津用水の西に居り萩島の土地を開墾した、故にこの邊をくましろ田といふ、墓は堤防の西側にある。

大久地村でこの萩島と外坪、秋田傳右工門新田は表百姓、或は徳川百姓といひ徳川さまへぞくし其の他の小口と東春鉾島(三千石)とは竹の越百姓といつて扶知を竹の越へ納めたものである。

第八項 中小口にあるもの

一、五 穀 塚

中小口に五穀塚といつて五ヶ所に塚の跡がある、之は今から四五十年前までは毎年村人が八十八夜に五穀豊穰を祈つて此の塚に五穀を供へたと傳へられてゐる。其の場所をあげると

一、馬 場……首塚の東北、今の田圃の中にある。

- 二、三本杵の東へ約半町の所にある、現今は形なし。
 - 三、字下山伏にある、之は一名蛇塚といふ、蛇の如く長さ千二百間もあつたといふ。(大久地古事記にもある)
 - 四、中小口字榎坪にある、之は酒井謙一の所有になつてゐる。
 - 五、學校の東、仙田庄兵工の道路西にある、梅田鎌吉の所有田である。
- 以上五ヶ所あつたが現在はない。五穀を供へる時は香箱のやうな物に入れて埋めたといふことである。

二、首 塚

酒井佐一の附近にあつた、昔武將が討死し其の首を埋めた所といふ。耕すに祟りがあるといはれてゐる、最近勇八といふ人が急死したと大久地古事記附記にも見えてゐる、東西に長く今は開墾して畑となつてゐる。

三、山 の 神

下山伏の字にある、一本の松が立つてゐる、明應年中の戦死者を埋めた所といはれてゐる。

四、六 部 橋

現在はコンクリート造りの立派な橋で昭和七年に架替へをされた、此の橋には次の如き説がつたへられてゐる。
昔六部が諸國を遍歴して廻り、遂に大久地村の中小口に來りこゝに土着して附近の人の爲を思ひ幼川に架したのが六部橋であると、尙中小口にはその子孫が現存してゐると、又一説には六部が諸國遍歴の途次この橋の所に來て行倒れたと、六部橋の西入鹿暴水流亡の碑と並んで六部の碑がたつてゐる、碑面には表に奉納大乘妙典六部國供養、側に寶歴

十一年申巳年青春 裏に尾州丹羽郡中小口村 領主導善、と記してある。

五、竹 橋

六部橋の川下に架してある附近を山屋敷といふ、もと此の邊は武家屋敷でもとは竹で架けた爲此の名が起つたと云はれてゐる。

六、姥 ケ 池

余野道の途中で今の小口駐在所のある邊に姥ケ池といふ相當大きな池があつた、今の餘野への道は此の池の真中を通つてゐるといはれる、之は織田遠江守廣近公が小口に築城した當時にあつたものだといふ、現在は田になつてゐる。

七、荒 井 の 榎

木津用水の西幼川の入口北に太い榎がある、之は一里塚のしるしとして犬山から一里二里と下へ植へられたものであるといはれてゐる。

八、入鹿暴水の碑

六部橋の西に建つてゐる、碑面に、暴水流亡各靈墓、横に、慶應戊辰歲五月十四日、の建立と記し尙施主柴山藤藏としてゐる、臺石に水害を受けた、羽黒、池野村、樂田村、橋瓜、五郎丸、下野、余野、小口、河北、外坪、傳右工門新田、宗雲新田等の村名が記してゐる。

次に入鹿池堤防決潰の當時模様並に暴水流亡碑に關係した記録を参考に載せておく、

「入鹿池は池野村にありて元尾張藩祖徳川義直公寛永二年始めて灌漑用として池の西南部に築堤工事を竣工に至らしめられしものにて其の周圍凡そ三里半と稱せられて居る程の大溜池なり。

然るに明治元年四五月兩月に亘りて霖雨數旬連續し、爲めに近傍一帯の小山脈より盛んに雨水が池に流入り池の西南なる堤防に溢れるばかりの大水となりて事態將に急變を出現すべき危険の形成を示すに至れり。

此の時池下の各村落の人々、又水役人の恐怖一方ならずして小牧の代官所よりは時の代官須賀井兵一郎出張し各村民と相呼應して決潰豫防の應急手當を施すに努力せしもなほ降雨連續し爲に防止の策も其の効空しく遂に五月四日午前四時頃に至り池の西南部の堤防決潰し初め見る／＼内に數百間に及びさしもの大海の如き水が忽ち一度に流出せし現狀はあたかも海瀧の如き物凄き事言語に絶するばかりなりしと云ふ。

其の下流地域に當れる村落にして最も慘狀を極めしは、池野村を初め羽黒、樂田、橋瓜、五郎丸、下野、余野、小口、河北、外坪、傳右、宗雲新田の諸村にして又侵水區域は丹羽郡、春日井郡、中島郡、海部郡の四郡にまたがりて百三十三ヶ村に及び被害の最も多かりしは、慘狀區域にして流失家屋八百七戸侵水家屋一萬一千七百九戸、慘死者九百四十一人、負傷者一千四百七十一人流歿耕地八千四百八十町五段二十歩の多きに達し慘害區域に於ける民衆宿るに家なく食糧なく日夜號泣して爲す所を知らざりし慘狀は實に名狀すべからず、此の時藩主特に救濟方法を講じ被害民に五ヶ月間の食糧六千三百八十八石四斗四升七合二勺、又手當金、苗代金、田地復舊費等合計金五萬一千四百四十六兩三分十四匁九分に達したりといふ。」

當時小口の地域内で溺死せし死體を字下萬願寺の地現今(仙田水車)の在る所より少し北の方に隔りたる地點に於て大なる穴をほりて多數の死體を悉く寄せ集めて埋め其の場所にて各一同の死靈に弔詞すべく近郷の寺僧は此の事たるや前代未聞の慘事の極みなる故を以て相互謀りて遠近の僧侶數十人集ひ尙其の當時美濃國岐阜の地梅林の瑞龍寺の住職にて雪潭禪師大和尚といへる大禪智識の稱ある大徳有る人(此人もと美濃の國伊深の正嚴寺に永年住みし事ありし故にや伊深正嚴寺の雪潭禪師と一説に云ふ)を招聘して弔師の大導師とし懇ろに大施餓鬼供養を勤修せらる。

此の日風少しもなき晴れやかなるにも拘らず太き青竹四本を齊靈所の四隅に立て佛道の法式に依り綱を巡らし夫れに四天王(南方增長天王、西方廣目天王、北方多聞天王、東方持國天王)の旗を祀りありしが不思議なるかな供養中ばに折れ倒れし竹一本あり、其の時參拜してありし遠近の男女數多の群衆異口同音に涙と共に念佛高らかに唱名せりと古老はいひ傳ふ。

第九項 下小口にあるもの

一、曲玉様

下小口、俗に三軒屋、酒井倉助附近にある塚で近所の人達はこゝから曲玉、刀劔が出たから曲玉様とよんでゐる、この字名は新田、塚は三つある、開墾した時曲玉(親指大のもの)刀劔(ぼろぼろのもの)埴輪等が掘り出されたが今は崇るといつてそのまゝになつてゐる。

二、山の神

昭和三年二月取りこわし山の神様も下小口の神社に合祀された、こゝで山の子の日に集つて神をまつた。

三、念佛橋

西村一郎附近の橋、念佛橋のいわれはあまり詳細でない。

四、伏蛇池

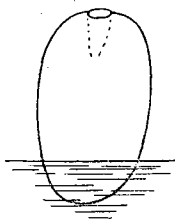
一名沼田ヶ池といふ。足利直量が小牧山（飛熊山）から大蛇を追つて来た時この池へ逃げて来たと傳へられてゐる、大へん深く底なし池といはれてゐる。

五、おさが淵

酒井收衛より約二町下流幼川が淀む所をおさが淵といふ、此こは慾深い婆さんが、流れて来るおさを取らんとして遂に河におちた所であつた名が出たといはれてゐる。

六、天王様の石臼

下小口の火の見の北側に天王様（津島神社）が祀つてあつたが其の邊から石臼が二つ出た、之は普通の石の真中に深さ二寸位の穴があけてあるを之を石の棒で堅い物を搗いたといふことである、下小口の各字（四つ）に津島様が祀つてある所がある、そこからもこの石臼が出たといはれてゐる。



七、字名について

下小口には現在と違ふ字名がたくさんある、さうしてこゝにいふ名があるかよくわからない。

イ、すり鉢（現在は下猿境、下丹羽森）

ロ、足洗（同 中流れ）

ハ、おかた塚（同 新田前：役場北東の塚）

ニ、東樂（同 寺田前）

尙俗に三軒家と云つてゐる所は「散劔矢」で足利義量將軍が雷を攻めた時劔や矢がこの邊りに散らばつた爲（一説は文明の頃の戦）かゝる名が出たといはれてゐる之に關聯して「大屋敷」多矢敷 竹田「多劔田」なごかような所から名が出たものであるまいかといはれてゐる。（大久地古事記参照）

八、中山塚

竹田の東にある、現在は畑で金のちやぼが居たといはれこの附近に「西流れ」の名が残つてゐる。

九、長塚

野田野西にあつて昔は中山塚ともう一つ名のない塚と三つ長く續いてゐたものらしい、現在長塚の跡は一部分しか残つてゐない。

一〇、吟味塚

和歌ヶ橋より西北約十間位の所で小池與八郎が百姓以外の人は何人通るかをこゝで一々吟味した所と云ふ。

一一、無名の塚

西流れ南半町乗船と云ふ所にある、こゝら邊は西流れ乗船とかと、川や海に關係の深い名がある附近に井戸があつて花瓶水差し類の素焼が掘り出される。現在は田で井戸端に石がたて、ある。

一、二、其他の塚

以上舉げた外は野田野と役場との間、稻口西附近に多數塚があつた、多分入鹿用水洪水の折りの寄せ塚であるといはれ現在は縣道の爲取りこわして無くなつてゐる。

出土品

一、石 斧 大正十四年五月豊田山の神地内で發掘された

現今同字社本利男の所有。

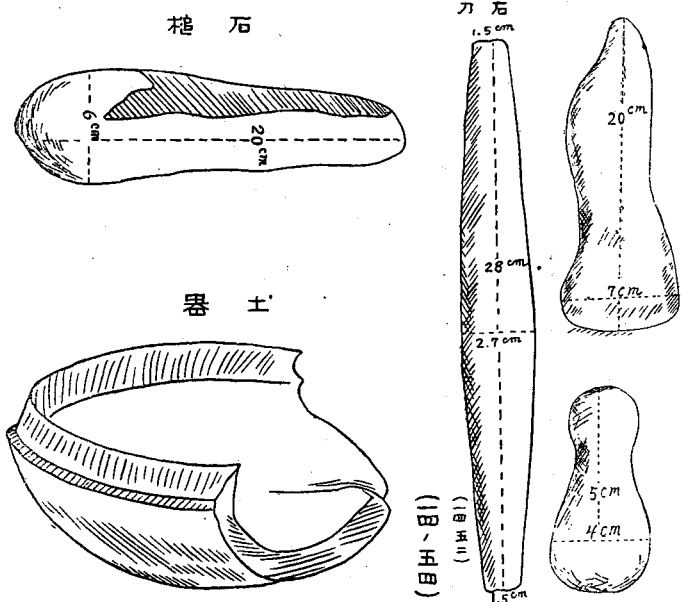
一、皮ハギ器 大正六年三月豊田山の神地内で發掘現在豊田

社本利男の所有。

一、矢の根石 豊田地内では所々から矢の根石が發掘される

一、石刀、石槌、土器 右三品は昭和六年八月大字豊田東奈

良子から發掘したもので現今本村第一小學校の所有となつて居る。



第十五章 人物傳記

第一節 總 說

古來本村に於ける日本的人物としては堀尾吉晴を擧げ得るのみ。織田廣近の遺跡はあるけれど、唯小口城主たりしにとゞまり本村の人物としては廣い意味での人物とよりにへない。其他左に擧ぐるの人々は、本村内或は本郡内に於て有名であるといふに過ぎず、それもまことに寥々たるものである。蓋し本村が古來純農村として、村民の質朴さが農事にのみ専念するの餘り、他方面に伸張の餘地を興へられなかつたこと、尾張の北部に僻在するといふ地理的關係によるものか。けれども明治、大正、昭和と開化の度の高まるにつれ、現在に於ては本村の誇り得べき人物も二三にしてとゞまらないが、現存の人である故をもつてこゝに採らないことにした。

第二節 各 說

一、織田廣近

幼名與十郎卿近といふ。織田卿廣の子岩倉城主敏廣の弟にして、丹羽郡小口村に居城し後犬山城を築きて移住す。後